なかない少女とよなきポケモン

オオルリ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雪の降る静かな町。

ある日、イタズラ好きなムウマは美しい少女と出会いました。しかし少女はある出来事から心を閉ざしており、その心は氷のように冷たくなっていました。いくら驚かしてみても、少女は怖がりもしなければ、泣きもしません。

よなきポケモンの名にかけて、ムウマは何としても少女を怖がらせて泣かせてやろうと決めました……。

ムウマ視点でつづられる、ポケモン世界の片隅の物語。

目次

1 少女と墓石 ―― 1
2 他人の我が家 ―― 14
3 人の言葉、ポケモンの言葉 ―― 26
4 四つ葉のマフラー ―― 36
5 泣けない心 ―― 54
6 あたたかな恐怖 ―― 66
7 少女とムウマ ―― 90

1　少女と墓石

草木も眠る丑三つ時、赤ら顔の酔っぱらいが墓地の近くを歩いていた。
遅くまで酒をしこたま飲んでいたのか頬は上気し、その足元はポケモンのパッチールのようにフラフラとしていた。
季節は冬。
空からは粉雪が舞い踊りレンガの小道を白く染めていたが、男の体はぽかぽかと暖かく、身を切るような寒さなど全く気にならない様子だった。気持ちよさげに鼻歌などを歌っている。雪を踏み鳴らしながら、乱れた足跡を地面につけていく。

そんな男の耳に、ある物音が聞こえてきた。
「うん？」
それは細く開いた窓の隙間を風が通り過ぎていくような、あるいは、若い女のすすり泣く声のようにも聞こえた。
こんな時間のこんな場所に女がいるはずないと思いつつ、男は足を止めて音のする方に顔を向けた。

どうやら音は、墓地の奥の方から聞こえてくるようだった。試しに目を細めてじいっと彼方を見詰めてみるが、墓地内は薄暗く、闇が広がるばかりで何も見えない。
「なんだなんだ……？」
男は音の正体を確かめてやろうと、フラフラした足取りで霊園に足を踏み入れた。
……男は自分の意志でそちらに向かったつもりだったが、他の人から見れば、男は音に魅入られているように見えただろう。

人気のない薄暗い墓地を一人進む。
木の上には夜行性のヤミカラスやヨマワルなどが目を光らせて男のことを見下ろしていたが、男はそれには気付かず、立ち並ぶ墓石を避けつつ墓場の奥へ奥へと進んでいった。
ふと、前方に人影が見えてきた。
街灯が設けられていたのだが、その側の墓石の前に、若い女が膝をついて座り込んでいたのだ。
その姿は、まるでスポットライトを浴びる女優のように暗闇の中に浮かび上がっていた。降りしきる雪の中、こちらに背を向けて一人肩を震わせながらしくしくとすすり泣

いている。

時刻はすでに夜中の二時を回っている。男は驚きつつ女に声をかけた。

「こんな遅くにどうしました?」

声をかけても反応はなかった。

声が届いていないはずがないのだが、女は男を無視して泣き続けている。

「もし、どうしました?　大丈夫ですか……?」

男はもう一度声をかけながら、女の肩に手をかけてこちらに振り向かせた。

ゆっくりと、女の顔が明かりの中にあらわになる。

振り向いた女の顔には、目玉が一つしかなかった。

顔の真ん中にソフトボール大の大きさの目玉があり、それが闇の中で、ぎょろりと鈍い光りを放っていた。

口は耳元まで裂けており、まるで内臓のように赤黒くてぬめぬめした舌が口の端からだらりと垂れ下がっていた。ぴちょんぴちょんと、地面によだれを垂らしている。

どう見ても。

それは人間の顔ではなかった。

「う、うわあああああああ!?」
　男は素っ頓狂な悲鳴を上げて尻餅をついた。慌てて逃げ出そうとするのだが、酒が入っていることもあって足元がおぼつかず、雪の上ですっ転んでしまう。腰が抜けてうまく歩くことが出来ない。
「あわわわわ……」
　泡を食ったように仰天して震えていると、女が大口を開けて迫ってきた。
『あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、あ〝、……!』
　裂けた口から意味不明な言葉を漏らしながら、まるでビデオのコマ送りのような不自然な動きで近付いてくる。
「ぎゃあああああああ!」
　男はずっこけたはずみで靴が片方脱げてしまったのも構わず、悲鳴を上げながら這々の体で墓場から逃げ出した。

　あとに残されたのは、ひとつ目の口裂け女。
　女は肩を揺らすようにくつくつと忍び笑いをしていたが、しまいには耐え切れなくなって大口を開けて大笑いするようになった。閑静な墓地内に女の哄笑が響く。

女がくるりとその場で一回転すると、ボンっと何かが弾けたように白煙が舞った。
女の姿が消え、代わりに空中に小さな影が現れた。
夜の闇のように黒い体に、まるで燃える人魂のように揺らめく髪。首元には数珠のような赤い珠が連なっていた。
それは”よなきポケモン”と称されるゴーストタイプのポケモン、ムウマだった。

ムウマはイタズラ好きな種族のポケモンで、夜中に女のすすり泣くような声を上げては人間や他のポケモンたちを引き寄せ、驚かせたり怖がらせたりしていた。
そうやって他者の怖がる心を首元の赤い珠に集め、栄養にして暮らしているのだ。先程のひとつ目の口裂け女は、得意の”おどろかす”攻撃で出現させた幻である。

驚かし作戦が成功したムウマは嬉しそうにくるくると回りながら笑っていたが、やがて満足したように空高くに飛び上がった。
酔っ払っていたせいか、相手はたいそう驚いていた。男のすっ転びっぷりを思い出し、ムウマはもう一度にししと声を潜ませて笑った。
やはり驚かしがうまくいくと気持ちが良い。首元の赤い珠もいつもより輝いている。
ムウマにとって他人を驚かせるという行為は、食事も同じ。この調子でもっと人間や

ポケモンたちを驚かせてやろうと、ムウマは墓地から抜け出して町の方へと繰り出した。

夜勤で暇そうにしている警備員や、肩を寄せあって木陰で眠っているポッポなどを驚かせては夜じゅう遊び回った。

＊　＊　＊　＊　＊

やがて東の空が白み始めた。もうすぐ夜が明けてしまう。

ムウマは基本夜行性のポケモンだった。日が出てきたら巣に帰り、眠りにつく習性がある。

墓地に戻るべく町の上空を飛んでいると、向こうから友達のムウマがやって来た。髪の毛の毛先がバネブーの尻尾のようにくるりんと丸くなっているのが特徴の奴である。

どうやら彼も夜じゅう活動し、『食事』をしていたらしい。

ムウマは友達に声をかけた。

『やあ、首尾はどうだい？』

彼は満足気に肯いた。

『ふっふっふ。今日も上々だったよ。また墓守りの奴をしこたま驚かせてやったぜ』

ムウマたちがすみかにしている墓地には初老の墓守りがいるのだが、どういうわけか、この男はすごいビビリだった。墓地で暮らしているというのに、怪談やホラー、怖い話がてんで駄目なのだ。

くるりん髪の友達は、いつもその墓守りを驚かせたりからかったりして遊んでいた。曰く『リアクションがいいし、恐怖心の味もいいから止められない』らしい。彼の首元の赤い珠は、ムウマ以上に輝いていた。今日もお腹いっぱい、驚かせてきたらしい。

一口に恐怖心といっても、色々と味がある。

うまく驚かせて相手を怖がらせた時に生じる恐怖心は、得も言われぬ美味しさだった。うまく驚かせれば驚かせるほど、相手が怖がれば怖がるほど、味が良くなるのだ。

墓地の上空まで来たので二匹は下降を始めた。

『ん?』

ふと視線を下ろすと、朝もやの煙る墓地内に人影が見えた。まだ朝も早い時間帯だというのに、墓石の前に誰かいる。

それは十歳くらいの人間の女の子だった。クリーム色のマフラーを首に巻いている。手編みのものなのか、可愛らしい四つ葉のクローバーのマークの刺繍が施されてあっ

た。
雪の積もる墓地の中、たった一人である墓石の前に座り込んでいる。
少女を見下ろしながら友達が言った。
『最近よく見かけるね、あの子。ああやっていつも一人でお墓参りに来ているんだ』
『ふーん、そうなんだ』

こんな時間帯から子供が一人でお墓参りかと不思議に思ったが、ムウマは今日の仕上げに少女を驚かせてやろうと考えた。
『君も一緒に驚かせに行かないかい？』
友達も誘ったが、彼はふわぁと大きくあくびをして断った。
『いや、遠慮しておくよ。もう充分お腹いっぱいだし、眠いしね』
朝は人間たちや昼行性のポケモンたちにとっては起きだす時間だが、夜行性のポケモンたちにとってはおねむの時間なのだ。彼は眠たそうに目をとろんとさせていた。
『そうか。じゃあね、おやすみ』
『おやすみー。頑張ってね』

友達を見送った後、ムウマは気付かれないようにゆっくりと地上に下降し、少女の後

方に降り立った。横手に回りこみ、まずはこっそりと少女のことを観察する。
少女は他に何をするでもなく、膝を抱えるように小さくなって墓石の前に座り込み、ぼうっと墓石の表面を見詰めていた。マフラーをしているのでよく分からないが、首からペンダントのようなものを下げている。
その横顔を見て、ムウマは少々ドキリとした。
少女は、全くの無表情だった。

まるでガラス球のように冷たく澄んだ瞳をしていて、そのくせ顔は能面のように表情がなくて……まるで美しい人形のようだった。
時折口の隙間から白い息を吐いたり、長いまつげをパチリと閉じてまばたきをしたりするが、それらの動きがなければ、本当にただの人形だと勘違いしていたかもしれない。まるで時が止まっているかのように動かない。
それほどまでに朝もやの中の少女には生気がなく、また、美しく見えた。
しばしの間、少女の横顔に見惚れてしまう。
が、ムウマはハッとして我に返った。ブルブルと頭を振って気持ちを切り替え、驚かしの準備に入る。

お得意の”おどろかす”攻撃の幻術で髪の長い女の幻を作り出し、近くの墓の前に座り込んでしくしくと泣く演技を始めた。

最初は誰にも聞こえないような小さな声で。次第にそれをはっきりしたものにしていく。

女のすすり泣く声が、朝もやの煙る墓地内に響き渡るようになっていった。

少女がムウマの泣き声に気付き、顔を上げてこちらを見た。

普通の人間なら一人きりの時に墓場でこんな場面に遭遇したら、不気味に思って逃げ出すか、あるいは、警戒して体を強張らせたりするものだが、少女は表情ひとつ変えなかった。

元々無表情な女の子だったが、まるでつまらない映画のスクリーンでも眺めるかのような顔をして、ただただ無表情にこちらをじっと眺めるのみである。

（あ、あれ……？）

ここまで反応のない人間も珍しいな。

臆病な墓守りならば、この時点で震え上がって鳥肌を立てていることだろう。

ムウマは気を取り直し、作戦を続行した。

相手が動かないのならば、こちらから近付いていくまでである。

『あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟……』

ムウマは女に奇声を発せさせながら、腕だけの力で、下半身を引きずるようにずりずりと前進を始めた。

長い黒髪を振り乱し、地面に爪を立てるように指を食い込ませながら、ゆっくりとゆっくりと近付いていく。

『あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟……』

最初は動きの遅いコータスのようにゆっくりと這い進むことでたっぷりと『溜め』を作り、そして満を持して、ガサガサガサッ！　と一気にスピードを上げて肉薄した。大口を開けて世にも恐ろしげな雄叫びを上げる。

『う〟は〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟！』

普通の人間なら一人きりの時に墓場でこんな場面に遭遇したら、それはもう怖すぎて悲鳴を上げて飛び退ろうものだが……少女は一切微動だにしなかった。

怖がることもせず。

逃げる素振りも見せず。

ただただ迫り来る女のことを冷たい瞳で見詰めていた。

いつの間にか、少女の端正な顔がすぐ目の前にあった。
お互いの鼻の頭がくっつきそう、息がかかりそうなくらい近い場所に少女の顔がある。
しまった。
相手が逃げないからといって、思わず近付きすぎてしまった。これではもう接近して脅すことも出来ないし、今更離れてすごすごと撤退することも出来ない。
「……」
『……』
両者の間に微妙な感じの沈黙が流れてしまった。

びっくりした。
ここまでして一切驚かない、表情を変えない人間がいるなんて思いもしなかった。
相手がびっくりしないことにびっくりして、思わず〝おどろかす〟攻撃の幻術が解けてしまっていた。ボンっと何かが弾けたように白い煙が舞い上がり、ムウマ本来の姿があらわになる。
しばし見詰め合う一人と一匹。

『あ、あはははは……』

なんとなく気まずくなり、思わず愛想笑いを浮かべてしまった。口の端を持ち上げて苦笑いをする。

ふいに少女が立ち上がった。

反射的にビクッと反応するムウマ。

「……」

少女は無言のままムウマから視線を外し、マフラーを首筋に巻き直し、その場から立ち去ってしまった。

足音が遠のき、どんどん距離が離れていく。

遠ざかっていく少女の背中を見送りながら、ムウマは呆然と呟いた。

『い、一体なんだったんだ、あの子……』

2　他人の我が家

あれから何度か少女の姿を墓地内で見かけることがあった。

朝方や夕方などの時間帯にやって来ては、なにをするでもなくぼうっと同じ墓の前に座り込んでいる。どうやら普段は小学校に通っているらしいが、登校前や放課後など、それ以外の時間をここで過ごしているようだった。

ムウマは基本夜行性のポケモンなので日中は眠っていることが多いのだが、なんだか少女のことが気になって、うまく眠れなかった。間近で見た少女の冷たく無感動な瞳が思い出され、なんだか心がざわざわして落ち着かなくなるのだ。

夕方、今日も少女は墓地に現れた。

降り積もった雪に夕日が当たり、墓地全体をオレンジ色に染め上げている。空気は冷たく凛と澄み、少女の白い吐息がふわりと宙に舞っては幻想のようにかき消えていた。

少女はマフラーはしているものの、帽子や耳あてなどのその他の防寒具は身につけておらず、耳の先や鼻の頭は寒さのせいで赤くなっていた。本人は全く気になっていないようだが、見ているこっちが寒くなりそうである。

上空から少女のことをこっそりと観察していると、少女の側をスコップを担いだ初老の男が通りかかった。この墓地の管理人の墓守りだ。足元には”ねずみポケモン”のサンドパンを連れている。

あのサンドパンは墓守りの手持ちのポケモンで、墓穴を掘ったり、墓石を修復する仕事を手伝ったりしていた。背中にびっしりと硬そうなトゲが生えている。ちなみに性別はメス。

墓守りは足を止め、少女に声をかけた。

ここからでは何と言っているか分からなかったが、少女はそれをスルーしたようだった。顔も向けずにだんまりを決め込み、ただただ墓石を見詰めている。

これは何度も繰り返されたやり取りなのか、墓守りは諦めたように肩をすくめ、その場から離れていった。サンドパンも気遣わしげにちらりと少女のことを見やったが、主人の後を追いかけて去っていく。

あれから何度かムウマは少女のことを驚かせてやろうと挑戦していたのだが、結果はいつも失敗に終わっていた。

手を変え品を変えながら何とかビビらせてやろうとしているのだが、少女は悲鳴も上げなければ驚きもしなかった。一切表情を変えず、じっと氷のように冷たい瞳をしてこちらを見詰め返すだけである。

友達のくるりん髪のムウマにも協力してもらい、二匹がかりで驚かせてやろうとしたこともあったが、それも虚しく空振りに終わってしまっていた。

驚かしの腕にはそれなりに自信があったのだが、このままでは自信を喪失してしまいそうだ。

また少女が墓地にやって来た。

よなきポケモンの名にかけて、今日こそは少女をびっくりさせて泣かせてやろうと気合いを入れる。

ムウマは少女がいつもの墓石に来る前に先回りをし、スタンバイした。

少女がいつもの定位置に膝を抱えるようにして座り、ぼうっと墓石を眺め始めた。今日も四つ葉のクローバーの刺繍が施されたマフラーを大事そうに身に着けている。

しばらくすると、墓石の表面に掘られた文字がゆらゆらと揺らめき始めた。

文字の一つ一つが、ゆらゆらもぞもぞと、まるで春先の虫のように蠢きだしたのだ。

「……？」

さすがに自分の見詰めている墓石の変化は放っておけなかったのか、少女は若干怪訝そうな顔をしながら腰を上げた。

ゆっくりと墓石に近寄り、何が起きているのかを見極めようとする。

その時、みょ～んとお餅のように墓石から黒い影が伸び出した。

そう、ムウマは少女を驚かせるために見えないように姿を消し、墓石の表面に張り付いていたのだ。

そして、ここぞというタイミングで雄叫びを上げながら飛び出した。

『あ、あ、あ、あ、あ、……！』

が、あまりにも気合いを入れて飛び出したのたものだから、目測を誤り、ゴチンッと少女と頭がぶつかってしまった。

図らずも”ずつき”のような攻撃を繰り出してしまい、反動で吹っ飛ばされるムウマ。

痛かった。

少女は意外にも石頭なタイプのようで、目から火が出るかと思った。ムウマは額を抑

えながら、別の意味で『あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟……！』と呻いた。
『痛てててて……』
頭を振って気を取り直し、少女の方を見やる。

少女は突然のことに驚き、その場にペタンと尻餅をついていた。額を抑えて、鳩が豆鉄砲を食らったかのような顔をして瞳をぱちくりさせている。
しかし犯人の正体がいつも自分にちょっかいをかけてきたムウマだと気付くと、すぐにいつもの無感動な顔付きに戻ってしまった。少しだけムッと眉間にしわを寄せ、冷たい瞳をして恨めしげにムウマのことを睨みつけている。
『あ、あはははは……』
気まずくなり、またしても苦々しく愛想笑を浮かべるムウマ。
少女は無言のまま立ち上がり、尻についた雪や泥を払い落とし、背中を向けて墓地から立ち去ってしまった。

遠ざかっていく少女の背中を見詰めながら、ムウマはハァと重々しくため息をついた。
今日も失敗してしまった。

頭突きを食らった瞬間はびっくりしたように目を見開いていたが、あんな風に驚かせたかったのではない。もっとちゃんとした恐怖心を与えて、泣かせてやりたかったのだ。

ふと、降り積もった雪に埋もれるように何かが落ちているのに気がついた。

それは少女がいつもマフラーの下に身に着けていたペンダントだった。ロケットペンダントだったのか、蓋が開いて中の写真が覗いていた。

そこに映っていたのはまだ若い壮年の男女と、少女の姿だった。

きっと彼女の家族写真なのだろう。どの人物も暖かく笑っていて、ぎゅーっと肩を寄せ合って一枚の小さな写真に収まっていた。とても仲睦まじげである。

『……』

ムウマはしばらくの間黙って写真をじいっと見下ろしていたが、きっとこれは少女にとってとても大切なものだろうと判断し、届けてあげることにした。

ネックレスの部分に首を突っ込んで首から下げ、少女の後を追いかける。

いつも墓地内で少女のことを待ち構えていたので、ムウマは少女がどこに住んでいるのかは知らなかった。

一度空高くまで上昇し、上空から少女の姿を探すことにした。きっとまだそう遠くには行っていないはずだ。

キョロキョロと地上をくまなく見回していると、少女の姿を発見した。夕日に照らされたオレンジ色の町、雪の積もった道の端を俯きがちに歩いている。

ムウマはペンダントを落としてしまわないように注意しながら下降した。

こんな冬の寒空の下だというのに、買い物帰りの主婦らしき人物が二、三人集まって井戸端会議を開いていた。手をひらひらと動かしながら楽しげにおしゃべりに興じている。

その中の一人が少女の存在に気付き、声を潜めながら言った。

「あの子、最近事故でご両親を亡くしたらしいわよ。まだ若いのに、可哀想に」

他の主婦たちが相槌をうった。

「あの見通しの悪い交差点でしょう？　物騒よね」

「でもあの子、毎日のようにお墓に行ってるらしいわね。声をかけても無視されるし、いつも無表情で何を考えているかわからないし……。少し不気味ね」

「親戚の所に引き取られたらしいけど、うまくやっていけているのかしら」

好き勝手に噂話を繰り広げていた。

『……』

ムウマはそれらの話を、姿を消してこっそり盗み聞きしていた。こういう時、自在に姿を消したり現せたりするゴーストの体は便利である。

少女の後を尾行していると、ある二階建ての住宅に入っていった。小さいながらも新しくて小綺麗な感じの家だ。

ムウマは窓辺に近付き、こっそりと中の様子をうかがった。

ちょうど夕飯時らしく、リビングのテーブルには美味しそうな料理が並べられていた。どれも暖かそうに湯気を立ち上らせている。

少女の他に、三人の人影があった。

夫婦らしい三十代くらいの男女と、年端もいかぬ赤ん坊である。赤ん坊は多分まだろくに言葉もしゃべれないくらいの年齢なのだろう、口の周りをベタベタにしながら、両親に二人がかりで食事をさせてもらっていた。手をグーの形に握りながら、上下にばたつかせて暴れている。

その反対側の席に、少女が座っていた。静かにナイフとフォークを動かしながら、

黙々と食事を続けている。
食卓には四人の人間がついていたが、少女と若い夫婦らの間には、何か大きな隔たりがあるように見えた。一見暖かな家族団らんの図だが、どこかすきま風が吹いているような、そんな寂寥感を覚える。
食事を終えた少女はひとり言のようにごちそう様でしたと手と口を動かし、食器をキッチンの流しに運び、そのままリビングを後にした。
夫婦は少女の背中を見詰めながら何か言おうと口を開きかけたが、言葉が出ず、困ったように顔を見合わせていた。赤ん坊がぐずりだしたので、慌ててあやしたり食事の続きを始める。

ムウマも少女の後を追いかけて建物の側面に移動した。
二階の小さな部屋が彼女に与えられた自室らしかった。
机とベッドと棚があるだけの簡素な部屋。部屋の隅の方にダンボールが積まれていたが、どれも開封されてはいなかった。
少女は部屋に入るな否や電池が切れたようにベッドに突っ伏し、動かなくなってしまった。
緩慢な仕草で枕元の写真立てに手を伸ばし、しばしその写真を見詰め……胎児のよう

にぎゅっと抱えて丸くなる。

それは、少女の本当の家族の写真だった。
学校の入学式の時に撮ったのだろうか？　学校の校門の前で、少し緊張気味にかしこまっている幼い少女の姿が写っていた。
その横には、少女の両親が優しく微笑みながら寄り添っていた。カメラ越しに、今の少女を見詰めている。

ムウマは理解した。
少女は事故で両親を亡くし、一人きりになった。
まだ若い夫婦の所に引き取られてきたが、二人は新生児にかかりきりだし、本当の家族ではない少女にはこの家は居心地が悪く、居場所がない。
だから毎日のように墓地を訪れているのだろう。

……墓地がどういうところかは知っている。
あそこは、死んだ人間や、ポケモンたちが眠るところだ。
多くの人が泣いていたり、悲しそうな顔をして訪れる。

あるいはその悲しみを乗り越えて、尊く健やかな顔をしている。
だが少女は……。
ムウマは両親の墓石を見詰める少女の横顔を思い出した。
少女は、いつも無表情だった。
まるで心が空っぽになってしまったかのように、冷たくて空虚な表情をしていた。

ムウマは少女に気付かれないようにそっと室内に潜り込み、机の上にロケットペンダントを置き、その場から離れた。
いつの間にか夕日は彼方に沈み、町には夜の帳が下りていた。頭上では星々が宝石のように光り瞬いている。
ムウマは瞳を閉じながら、冷たく澄んだ夜の空気に体を溶け込ませた。
あの少女は、未だに両親を失った痛みの中にいるのだろう。
悲しくて悲しくて。
痛くて苦しくって。
心がどうにかなってしまいそうになっているに違いない。
だがムウマは、少女が泣いている姿を見たことがなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

墓地に帰ると、くるりん髪の友達のムウマが高笑いしながら墓地の上空を飛んでいた。

下を見ると、こんな寒空の下だというのに、全身ずぶ濡れになった墓守りとサンドパンの姿があった。仕事の途中だったのか、スコップを片手にわなわなと震えている。

どうやら友達のムウマがまだぞろ墓守りに対してイタズラを仕掛け、それがまんまと成功したらしい。空を舞う友達はとても上機嫌で、首元の赤い珠も強く輝いていた。

全身濡れネズミにされた墓守りは怒り心頭に発していて、スコップを頭上に振り上げて叫んでいた。

「このイタズラムウマめ！　いつか目に物見せてやるからなぁ！」

感情を剥き出しにしながら怒っている。

少女もあれくらい感情を見せてくれればいいのに、と思った。

3　人の言葉、ポケモンの言葉

クリスマスが近付いてきた。

墓場にはあまり変化はないが、町はにわかに賑やかになってきた。

葉の落ちた街路樹にはイルミネーションが巻かれ、そこここで可愛らしい明かりが瞬いていた。

日が落ちるのは早くなったが、町全体が色とりどりの光で照らされるようになった。

町の広場には大きなもみの木が設置され、町のみんなで飾りつけを行っていた。もみの木のてっぺんには幻のポケモン、ジラーチを模した星の飾りが設けられている。

町が活気づくと遅くまで人が出歩くようになるし、イルミネーションに気を取られて油断している人も多い。この時期はムウマたちも大いに働きやすくなる季節だった。最も、一年で一番活躍できる季節はハロウィーンなのだが。

人に飼われているムウマはポケモンフーズやポフレなどがあれば生きていけるらし

いが、野生のムウマの主な食料は他人の恐怖心である。木の実なども食べるが、やはり一番美味なのは他人の怖がる心だ。
厳しい冬を乗り越えるためにも、今のうちに食い溜めをしておかなければならない。
友達のムウマは墓守りをからかう以外にも精力的にあちこちに出掛け、人々を驚かせては食事にありついていた。

一方、ムウマはずっと墓地内にいた。
墓地内で、四つ葉のクローバーのマフラーをした少女の様子を見守っていた。
少女は相変わらず、毎日のように墓地を訪れていた。いつも一人、冷たく孤独な目をして両親の墓石の前に座り込んでいる。

人を驚かせて生きるよなきポケモンのプライドにかけて、何としても一度くらい怖がらせてやろうと思って何度も挑戦しているのだが、相変わらず空振りの日々だった。
今日は”おどろかす”攻撃に”かげぶんしん”の技をプラスして、血まみれのゾンビの幻を大量に作り出し、土の中から這い出して少女の周りを取り囲むという演出で挑んでみた。”おにび”の技を使い、青白い人魂を出現させるというオマケ付きだ。

しかし、今日も今日とて、作戦は失敗に終わっていた。

「……」

大量のグロテスクなゾンビで囲んでみても、いつも通り無反応でスルーされる。

まるで自分が空気か何かになったかのようだった。

のれんに腕押し。

糠に釘。

ここまで手応えがないと逆に清々しいくらいである。

ハァ、今日も駄目だったかと気落ちしながら”かげぶんしん”を解いて”おにび”の炎を鎮火していると、ふいに少女が口を開いた。

「……少しやせた？」

ムウマはびっくりして思わず飛び上がってしまった。

人を驚かせるのが本分なのに、逆に驚かされてしまった。

（この子の声、初めて聞いた……）

周囲をキョロキョロと見回してみたが、他に人影もポケモンの姿もない。少女は間違いなく、ムウマに話しかけていた。

少女はちらりと横目でムウマの姿を眺め、繰り返した。
「……少し、やせたんじゃない？」
少女の声はとても小さく、若干かすれたような感じだった。子供らしい、幼い声。
でもどこか大人びた、静かな声。

確かに、ムウマは以前に比べて若干やせ細っていた。
何としてもこの少女を怖がらせようと躍起になっていたので他で食事が取れず、ずっと絶食状態が続いていたのだ。首元に連なっている赤い珠も、若干光をなくしていた。
少女は墓石に視線を戻し、ひとり言のように静かな口調で呟いた。

「あなたちにとっては、人の恐怖心や、泣き叫ぶ声がご飯なんでしょう？」
『……』
「でも私は悲しいことがあって、すごくすごく悲しいことがあって……。もう、泣き疲れちゃった。涙は出ないし、驚いてもあげられない」
『……』
「私なんかに構っていないで、他に行けば」

まさか少女の方から声をかけてくるなんて思っていなかったので、どう反応すればいいか分からず、ムウマは固まっていた。
ただ少女のその声は、そのセリフは……なんだかとても悲しくて、寂しそうで、聞いているだけでこちらの心も凍えてしまいそうになった。
深い孤独。
この子はずっと、こんな孤独の中に一人でいたのかと考える。

ポケモンは人の言葉を喋れない。
もしムウマが「やあ、こんにちは」と話しかけたとしても、人間には「ムゥ、ムゥムウマ」と鳴いているようにしか聞こえないだろう。
しかしそれでも何かを言ってやりたくて、声を届けてやりたくて、ムウマは口を開こうとした。
『君は……』

その時、ふいに夕日が陰った。
「……またこんな所に一人でいるのか」
彼方から声をかけられる。

見るとそこには、少女と同い年くらいの男の子が三人、夕日を背景に立っていた。サッカーをしてきた帰りなのか、一人はサッカーボールを小脇に抱えている。
ニヤニヤと意地悪そうに笑いながら、少女のことを見下ろしていた。

真ん中のガキ大将風の体の大きな少年が、からかうように大きな声で言った。
「こいついつも一人で墓地にいるよな。不気味だぜ」
他の子たちも同調し、はやし立てるように言葉を浴びせかけてきた。
「全然笑わないし人形みたいに無表情だし、本当に人間なのかよ」
「もしかしたら幽霊なんじゃないの？」
「ひゃあ、おっかねえ」
「除霊しなきゃ、除霊！」
少年たちは口々に心無い言葉を浴びせかけ、おどけるように十字を切る仕草をした。

少女はちらりと横目で少年たちを盗み見たが、すぐに視線をそらしてだんまりを決め込んでしまった。体をぎゅっと抱きしめて小さくなって、少年たちの揶揄をやり過ごそうとする。
もしかしたら少女たちは同じ学校の生徒で、いつもこうやってからかわれているのか

もしれない。

「……すましやがって。なんとか言ったらどうなんだ、こいつ！」

あまりにも少女が無反応なので、少年の一人が雪玉を作って投げつけてきた。

雪玉が少女の頭に直撃し、バシャと砕ける。

それでも少女は無言を貫き、無反応だった。

「こいつ……」

躍起になった少年が再び雪玉を作り、投げつけようとする。

その様子を側で見ていたムウマは、腹を立てていた。

少年たちにもそうだが、何の抵抗もしようとしない少女の方にも腹が立った。

窮鼠猫を噛む。ニャースに追いつめられたコラッタだって、最後には牙を剥いて反撃するものだ。こんな風にやられっぱなしでいるなんて……これでは墓場に眠る死者たちと何も変わらないではないか。

ムウマは空気に溶けるように気配を殺し、こっそりと透明化して姿を消した。

と、少年たちの背後で音がした。

それは細く開いた窓の隙間を風が通り過ぎていくような、あるいは、若い女のすすり

泣く声のようにも聞こえた。
少年たちは調子に乗って悪ふざけを続けていたが、ここが死者たちの眠る神聖な場所だと思い出したのだろう。ギクリとしたように首をすくめ、硬直した。
三人で顔を見合わせ、まるでぜんまい仕掛けのおもちゃのようにぎこちない動作で後ろを振り返った。

だが、そこには不審なものなど何もなかった。静かに墓が立ち並び、大きな夕日が彼方の空に浮かんでいるだけである。
「だ、誰もいない……？」
「な、なんだよ、気のせいか」
「驚かせやがって……」
口々に呟き、ほっとしたように正面に向き直る。
少年たちの目の前に、水死体の女が立っていた。

長い髪は濡れそぼって額に張り付き、皮膚は腐ってただれてブヨブヨになり、まるで蝋燭のように体全体が真っ白になっていた。
頬には極小サイズのコソクムシがざわざわざわざわと這いまわり、眼球があった部分

にはポッカリと穴ぼこが開いていた。少年たちをがらんどうでな瞳で恨めしそうに見詰めている。

そんな顔が、少年たちの顔の真ん前、鼻と鼻がくっつきそうなくらいに間近にあった。

ぶはぁと、磯臭い腐ったような息を吐きかけられる。

少年たちは悲鳴を上げた。

「う、うわあああああああああ!?」

さらにムウマは”サイコキネシス”の技を使って雪を操り、少年たちの首筋に大量の雪を流し込んでやった。

「うぎゃあああああああああああ!」

突然女の水死体が現れるは首筋に冷たいものを流し込まれるはで、少年たちは一瞬にしてパニックに陥っていた。みっともなく悲鳴を上げて飛び上がり、持っていたサッカーボールを放り出して脱兎のごとく逃げ出す。

足がもつれて、向こうの方で一人が見事にすっ転んでいた。

そんな少年たちの背中を見送りながら、ムウマは”おどろかす”攻撃を解いて元の姿に戻った。ボンっと白い煙が舞って水死体の女が消える。

久しぶりに驚かしに成功し、人を怖がらせることが出来た。
なんだ、やっぱり自分の腕もなかなかじゃないかと自認し、満足そうににししと笑う。

「ふふっ……」
ムウマの笑いにつられたように、小さく笑い声が聞こえてきた。
えっ、と思って後ろを振り向く。
そこには少女がいた。
少女はそっぽを向いて素知らぬ表情をしていたが、一瞬だけ、少女がくすりと笑っていたように見えた。

4　四つ葉のマフラー

野生のムウマは夜行性なので、基本的に日中は眠っている。

最近は少女のことを気にかけて寝不足気味だったので、その日、ムウマはすみかの枯れ木で丸くなって熟睡していた。

木の上の方に出来た小さなウロが、ムウマの隠れ家だった。枯れ木といっても風を通さないし保温性も高いしで、これでなかなか居心地が良かった。

丸くなって静かに寝息を立てていると、突然激しい揺れが体を襲った。

『な、なんだ……!?』

ミシミシと音を立てながら我が家の枯れ木が上下左右に揺れている。

すわ地震かと思って慌てて外に飛び出すと、くるりん髪の友達のムウマと出くわし、出会い頭にごちんと頭をぶつけてしまった。

『うわっ!?』

『痛てっ！』

彼もまた同じ枯れ木をすみかにしていた。ムウマ同様揺れを感じて飛び起きてきた

らしい。寝起きざまに頭突きをくらい、お互いに目を白黒させる。

ムウマは謝りながら友達に話しかけた。

『ごめんごめん。それにしてもどうしたんだろう?』

『分かんない。地震かな?』

その時、下の方から声が響いてきた。

「こらーっ！　下りてこーい!」

見ると木の根本に墓守りとサンドパンの姿があった。

「いつもいつもくだらないイタズラを仕掛けてきおって！　今日こそ積年の恨みを晴らしてやる!」

どうやらいつも驚かされてきたことへの復讐に来たらしい。愛用のスコップを両手で振り上げながら怒鳴っている。

ということは、先程の揺れは彼の相棒のサンドパンの仕業なのだろう。木の幹に”みだれひっかき”なり”ころがる”攻撃などを仕掛け、寝ていたムウマたちを叩き起こしたのだ。

友達は犯人の正体を知り、あくびをしながらやれやれという風に肩をすくめた。
『なんだあの人か』
ムウマは友達をたしなめた。
『なんだあの人か、じゃないよ。ずいぶんとご立腹じゃないか。君があの人ばかりにちょっかいをかけ過ぎたせいだよ』
『そんなにはかけてないよ』
『この間だってずぶ濡れにしてたじゃないか。あれは何をしたんだい？』

友達は悪びれた様子も無く答えた。
『いやぁ、ちょっと包丁を持った人形の幻を見せて追ったら予想以上に怖がられてさぁ』
『それで？』
『調子に乗って追いかけ回してたんだよ』
『うんうん』
『そしたらあの人が足を踏み外して、池に落ちたんだ』
『……』
たぶんその時、堪忍袋の緒が切れたのだろう。

ムウマはため息をつきながら言った。
『何にしてもやり過ぎたんだよ。カンカンじゃないか、あの人』
友達はフワフワと空中を漂いながらのん気に笑った。
『いやぁ、だってあの人毎回毎回リアクションが面白いんだもの。恐怖心の味もいいし』
「こらーっ、聞いているのか！　覚悟しろよ、イタズラゴーストどもぉ！」
下では堪忍袋の緒が切れた墓守りが大声で怒鳴っていた。
明確な敵意を向けられているというのに、二匹特に慌てた様子もなく、のんびり会話を繰り広げていた。
友達が肩をすくめながら語る。
『でもまあ、相手があのサンドパンなら問題ないだろう?』

ムウマたちが余裕ぶっているのには理由があった。
墓守りが連れている相棒のサンドパンは戦闘のために育てられたポケモンではなく、いつも墓穴を掘ったり、墓石の修復の手伝いをしている家庭用のポケモンだったからだ。あのメスのサンドパンは、戦闘についてはほとんど素人なのである。
さらに相手は、地面タイプのポケモンだった。特性”ふゆう”を有しているムウマたちとはすこぶる相性が悪い。

実際に今までも何度かイタズラをした仕返しにサンドパンをけしかけられたこともあったが、まともにダメージを食らったことはなかった。

先程は木のウロの中にいたので、すわ地震かと思って慌ててしまったが、こうやって空を飛んでいればそれも関係ない。

まず負けることはないだろうと高をくくって余裕ぶってフワフワ浮遊していると、墓守りが指をさしてサンドパンに指示を出した。

「降りてこないならこちらから行くぞ！　行けい、サンドパン！　〝シャドークロー〟！」

『えっ？』

サンドパンが両手の爪に鋭い闇のエネルギーのようなものを纏わせながら、枯れ木を踏み台にして飛び上がってきた。上空のムウマたちに迫ってくる。

かわす間もなく、ズバッと友達のムウマがその爪で引き裂かれてしまった。

『うわっ……!?』

悲鳴を上げながらのけ反る友達。

ムウマは目を見張りながら叫んだ。

『シ、シャドークローだって!?』

友達を引き裂いたサンドパンは枯れ木の枝に華麗に着地し、今度はムウマの方に攻撃を加えようとしてきた。
ムウマは慌てたように攻撃技の”シャドーボール”を放とうとした。
迎撃してサンドパンを地面に撃ち落とすのだ。
が、地上の墓守りがスコップを振りかざしながら指示を出した。
「”すなかけ”攻撃ぃ！」
枯れ木を駆け上がってくる前に、予め持たされていたのだろう。サンドパンは手の中に砂を隠し持っており、それをムウマの顔目掛けてバッとばらまいた。
『……う！』
砂粒が目に入り、反射的に目をつぶって顔を逸らしてしまうムウマ。
発射準備が整っていたシャドーボールはサンドパンにかすりもせずに彼方へと飛んで行ってしまった。

その隙にサンドパンはくるりと一回転し、距離をとって別の枝に着地していた。前傾姿勢になり、背中のトゲを逆立てて警戒態勢をとっている。
砂粒を振り払ったムウマは、唖然としながらサンドパンの姿を見詰めた。
『あ、あのサンドパンってあんなに強かったっけ？』

以前のサンドパンとは、動きがまるで違っていた。
昔はゴーストタイプに有効なシャドークローなんて技を覚えていなかったし、そもそもあんなにバトル慣れしていなかった。

墓守りが腰に手を当てながら、自慢気に高笑いをした。
「どうだ、恐れ入ったか、うちのサンドパンの実力を！　四天王のキクコさんに頼み込み、ゴーストタイプのポケモンとの戦いを伝授してもらったのだ！」
『……!?』
まさかこんな所でその名前を聞くとは思わなかった。
四天王のキクコ。
ゴーストタイプのポケモンを使わせたら右に出るものはないと言われているほど高名なトレーナーだ。その名は野生のゴーストタイプのポケモンの間にまで届いており、一度は彼女の持ちポケモンになって活躍してみたいと憧れるものも少なくない。
キクコはゴーストタイプのポケモンを育成するのも上手ければ、その弱点や欠点についても熟知していた。
墓守りという仕事柄、彼は四天王のキクコと面識があり、色々とバトルのノウハウを

教わってきたらしい。
ついでにサンドパンも、対ゴースト系ポケモン用に鍛えてきてもらったようだ。道理で以前に比べて飛躍的に強くなっているはずである。

だが納得ばかりもしていられなかった。相手はまだまだ本気を出してはいないのだ。
あのメスのサンドパンは確か戦闘を好まない大人しい性格をしていたはずだが、今はやる気に満ち満ちた顔付きをしていた。
『ご主人様のためにやってやりますよぉー!』
というような顔をして、ムフーッと鼻息を荒くしている。
どうやらキクコにしごかれて性格まで変わってしまった様子である。

墓守りは攻撃を受けて弱っている方のムウマに指をさし、サンドパンに命令した。
「よし、もう一度シャドークローだ!」
再びサンドパンの爪に、鋭く尖った闇のエネルギーのようなものが纏わりついた。
ゴーストタイプのポケモンには効果が抜群のゴースト技である。
サンドパンが友達めがけて飛びかかる。
友達は先程受けたダメージが大きすぎたのか、未だに動けないようだった。目をつ

ぶって苦しんでおり、サンドパンが迫ってきているのも気付いていない。
このままでは再び攻撃が直撃してしまう。
『危ないっ！』
とっさにムウマは友達を庇って身を躍らせていた。
防御技の”まもる”を発動する暇もなく、シャドークローの攻撃をモロに受けてしまう。
『うぐっ……！』

攻撃は急所にヒットしたのか、びっくりするほど痛かった。
体が二つに引き裂かれ、ズタズタにされたような感覚。
危うく気を失いかけた。
地上の墓守りが嬉々として叫ぶ。
「よし、トドメだ！　そのままシャドークロー！」
しかし、ムウマは懸命に痛みをこらえながら、”いちゃもん”の技を発動した。
『何回も何回も、同じ攻撃ばかりしてるんじゃあない！』
シャドークローを使おうとしていたサンドパンの動きがピタリと止まり、爪の周りに纏わりついていた闇のエネルギーも霧散する。

いちゃもんは、相手に同じ技を連続で使用出来なくさせる技だった。とりあえず、これでしばらくの間はシャドークローは打てまい。

さらにムウマは半ば体当たりをするようにサンドパンに密着し、”いたみわけ”を発動した。

お互いの体力を足しあってから分けあい、きっちり半分半分にする技。

触れ合った肌を通してムウマが受けたダメージや疲労度がサンドパンの方に移動し、代わりに新鮮なエネルギーを吸収する。

『い、今のうちに逃げよう!』

痛みから回復した友達が叫んだ。フラッシュがわりに”あやしいひかり”を放ち、相手が目をくらませている隙に逃走して大きな墓石の裏に隠れる。

「こらーっ! どこに行ったーっ!?」

向こうで墓守りがスコップを振り回しながら叫んでいた。

一向に諦める気配はなく、混乱が解けて正常に戻ったサンドパンに”つるぎのまい”を舞わせていた。攻撃力がぐーんと上がる火力上昇技である。相手はどこまでも本気のようだった。

ムウマはハァハァと肩を上下させながら友達に小声で愚痴った。
『君がいつもからかい過ぎたせいだよ』
『あはは……だって面白いくらい怖がってくれるんだもの、あの人』
『……』
ジト目をして無言で睨みつけると、彼はしゅんとして『ごめんなさい』と謝った。

いつもはムウマたちが墓守りを驚かせて怯えさせていたのに、今はムウマたちが墓守りに追いつめられて怯えさせられていた。これでは立場があべこべだ。
『今僕たちが感じてる恐怖心を食べ合えば、なかなかに美味しいかもしれないね』
『そんな冗談を言ってる場合かよ』
ムウマは友達の笑えない冗談を受け流し、墓石の影からちらりと墓守りたちの様子をうかがった。
彼の怒りはまだまだ収まってはおらず、いつもは大人しく墓守りの足元に控えているサンドパンもやる気になって爪を鋭くさせていた。
ふいをついたり、背後に回りこんで驚かせたりするのは得意だが、ムウマたちは正面切って戦うのは苦手だった。
そもそも自分たちは”うらみ”やら”おんねん”やら”みちづれ”やらの搦め手系

の技ばかり覚えるので、ガチンコのバトルは不得手なのだ。

ムウマは友達に小声で尋ねた。

『どうする？　一旦墓場から離れる？』

『そうだね、ほとぼりが覚めるまでしばらく近付かない方が良さそうだ』

『でも、どこに行く？』

友達は唸りながらあるアイディアをひねり出した。

『うーん……ロトムの所とかどう？　ほら、森の奥の方の洋館に住んでる』

町外れの森の中には打ち捨てられた古い洋館があるのだが、そこには一匹のロトムが住んでいた。

ひょんなことから知り合いになり、同じゴースト系ポケモンということで仲良しになったのだ。あそこならば空き部屋も多いし、雨風もしのげる。ロトムも歓迎してくれるだろう。

しかし、ムウマは肩を落として深くため息を付いた。

『はぁ……。ここ、気に入ってたのに』

墓場は人を驚かせるには絶好のスポットなのだ。立地もいいし、長年住み慣れたあの

枯れ木を離れるのも惜しい。

そして何より、森の奥の洋館なんかに行ってしまっては、少女のことを見れなくなる。

『ま、まあそんなに気落ちするなよ。またロトムに新技でも教わって、驚かしの腕を磨こうぜ』

友達は努めて明るく笑ったが、今はそんな気持ちになれなかった。

黙りこんで感傷に浸っていると、ふいに二匹が隠れている場所の日が陰った。

「見いつけたあああああああああ！」

墓石の向こう側から年老いたシワだらけの手がぬっと伸び、墓守りの老人が顔を出した。ギラリと光る瞳をして、ムウマたちを冷たく見下ろしている。

『う、うわあああああああ!?』

ムウマたちは慌てて飛び退いた。

逆光になっていたせいで、その姿はなかなかに猟奇的でホラーだった。

「いつもいつもイタズラを仕掛けてきおって……。今日こそ成敗しくれる！」

時代劇調な口調で言い、スコップを構えながらずいずいと迫ってきた。

完全に普段と立場が逆転していた。『あわわわわ……』とたどたどしく後退するムウ

マたち。

「行けぃ、サンドパン！　〝いわなだれ〟！」

墓守りの指示を受け、サンドパンが地面をえぐって巨石を持ち上げた。ぐぐぐっと腕に力を込めて姿勢を低くし、投げつけようとする。

やられる、と思って覚悟を決めたその瞬間、両者の間にバサッと何かが放り込まれた。

「うん？」

『えっ？』

それはクリーム色のマフラーだった。

四つ葉のクローバーの刺繍がされた、手編みのマフラー。

見るとすぐ側のベンチの上に、あの少女が立っていた。いつもの様に無表情な顔をして、ベンチの背もたれに足をかけて、右手を高く掲げてこちらを見下ろしている。

どうやらボクシングのセコンドが試合を中止させるためにタオルをリングに投げ入れるように、サンドパンの攻撃を止めるために、少女が自身のマフラーを両者の間に投げ入れたらしい。

ふいをつかれ、巨石を持ち上げたままの姿勢で硬直するサンドパン。

少女は掲げていた右手を下ろすとベンチから飛び降りて、てくてくとこちらに歩み寄ってきた。

地面に落ちたマフラーを拾い上げ、パンパンっと雪や土の汚れを払い落とし、何事もなかったかのように何も言わぬまま丁寧に首に巻き直す。

唐突にバトルに水を差され、墓守りは驚いたように目をパチクリとさせていた。

おずおずと少女に問いかける。

「あ、あの、お嬢ちゃん……？」

少女は静かに口を開いた。

「誰だって、お腹がすけばパンを食べるでしょう？」

「え？」

「墓守りさんだってお腹がすけばパンやお肉、お魚や野菜を食べるでしょう？」

突然訳の分からぬ話を振られ、墓守りは困惑気味に肯いた。

「あ、ああ……。だがそれがどうしたというのだ？」

「この子たちにとっては、人の恐怖心や驚いた時に生まれるエネルギーが食料なの。人の恐怖心や怖がる心がパンや肉。それらがなければ死んでしまう……。だから少しは、大目に見てあげて」

墓地内ではよく見かけていたが、墓守りが少女と言葉を交わしたのはこれが初めての事だった。何を話しかけてもいつも無表情で無反応だった少女に正面から見据えられて、訳もなく少したじろいでいる。

「それにここは墓地よ。あんまり大きな音を立てていたら、お墓の下の人たちがびっくりしちゃうわ」

「あ、ああ……」

「あなたたちも、少しは悪さは控えなさい。約束できる?」

少女に話を振られ、ムウマたちはコクコクと力強く首を縦に振った。巨石を持ち上げて今まさに自分たちを押し潰さんとしているサンドパンを前にして、他に選択肢などない。

「ですって、墓守りさん」

墓守りは面食らったように少女を見下ろしていたが、仕舞いには、ふっと息をついて毒気が抜かれたような表情を浮かべた。

肩の力を抜き、怒りの矛を収める。

「……戻れ、サンドパン」

命令を受けたサンドパンは持ち上げていた巨石をそっと地面に戻し、墓守りの足元に戻っていった。挑戦的な気配は消え、いつもの大人しい墓守りのサンドパンに戻る。
墓守りは労うようにパートナーの頭を撫で、目を点にしているムウマたちにぶっきらぼうな口調で言った。
「もう滅多なことはするんじゃないぞ。……ほどほどにな」
踵を返し、スコップを肩に担いで小屋の方に去っていった。

後に残されたのは二匹のムウマと、一人の少女。
ムウマたちは顔を見合わせ、呆然と呟きあった。
『た、助かった……?』
緊張の糸が解け、その場にへなへなとへたり込む。
あ、危なかった……。
本当に岩に潰されてやられてしまうかと思った。
『まったく、えらい目にあったよ』
懲りてているのかいないのか、友達のムウマはおどけたようにあははと笑顔を浮かべた。

『いやぁ、僕のせいで君まで巻き込んでしまって申し訳ない』
『これからは彼を刺激し過ぎないように注意しないとね』
『あはは……善処するよ』
この分だとしばらくしたらまた墓守りにちょっかいをかけに行きそうだったので、
『絶対に駄目だからね！』とぐぐぐっと迫って念を押した。
『だって美味しいんだもの、あの人の恐怖心は』
『そんなんじゃ命がいくつあっても足りないよ』

そんな二匹のやり取りを、少女は傍らに座り込んで眺めていた。
どんな内容のことを喋っているのかは分かっていないだろうが、興味深げにじっとムウマたちのことを見下ろしている。
そして、いつも自分にちょっかいをかけに来る方のムウマに、心持ち優しげな口調で言った。
「これで貸し借りなしね」

5　泣けない心

少女に助けられてから数日が経った。

あれから友達のムウマは墓守りをからかうことをしなくなり、墓守りもムウマたちにサンドパンをけしかけてくるようなことはしなかった。

友達は今までの反省のためか、日中に起き出して墓地のゴミを拾ったり、落ち葉を集めて”おにび”の技を使って燃やしたりして、墓守りの仕事を手伝うような素振りを見せていた。

最初はその変わりっぷりに墓守りも驚いて「また何か良からぬことを考えているのではなかろうか?」と警戒していたが、勤勉に働くムウマの姿を見て、次第に表情を柔らかくしていた。

もしかしたら、同じ墓地で生活するもの同士、今までとは違った関係を築けるようになるかもしれない。

ポケモンはある程度人間の言葉を理解できるが、人間はポケモンの言葉は分からな

い。広い世界には人語をしゃべるニャースもいるらしいが、あいにくムウマには人間の言葉をしゃべるなど不可能だった。

それでもムウマは、あの少女にお礼がしたいと思っていた。一言ありがとうと伝えたかった。

奇しくも今日はクリスマスだった。

デリバードではないが、人に贈り物を渡すにはピッタリの日である。

といっても、野生のポケモンである自分には人間にあげられるものなどあまりない。あるとしたら、冬を越すための非常食として集めていた木の実の詰め合わせくらいだ。

……まあ、何もないよりはマシか。

こいつを持って行って、驚かてやろう。

時刻は夕方。

今日はまだ少女は墓場に現れていなかったので、こちらから会いに行くことにした。デリバードよろしく、木の実の詰まった白い袋を背中に担いで墓地を出る。

少女が暮らしている家まで赴き、窓から室内を覗いた。

リビングには綺麗に飾り付けられた小振りのクリスマスツリーがあり、その側に少女

以外の三人の家族が集まっていた。両親がプレゼントの包みを開き、中から出てきたモコモコとした小さな服を赤ん坊に当ててはしゃいでいる。

赤ん坊は今日がどういう日だか理解していないだろうが、暖かく微笑んでいる両親に囲まれて嬉しそうにしていた。とても和やかな雰囲気である。

ツリーの下には、もう一つ未開封のプレゼントが置かれていた。もしかしたらあれは、養父たちが用意してくれた少女用のプレゼントだろうか？

しかし室内に少女の姿はなく、他の部屋も探してみたが、どこにも少女はいなかった。どうやら外出しているようだ。

ムウマは町の上空まで飛び上がり、空から少女の行方を探すことにした。

クリスマスということもあり、町のそこここに幸せそうなカップルや、家族連れの姿があった。気温は低く吹き抜けていく風は冷たかったが、どの人もとても暖かそうな表情をしている。町中がウキウキと浮かれているような感じだった。

やがて日が暮れて、辺りは静かに薄暗くなっていった。

街灯がポツポツとオレンジ色の柔らかな光を放ち始める。

気温も下がり、空から雪が降り始めた。まるで妖精のように白く細かな雪がフワフワ

と舞い踊る。ホワイトクリスマスだ。
上空から見下ろしていると、雪の積もったその町は、まるで蝋燭の立っているクリスマスケーキのように美しく見えた。
以前のムウマなら町を見下ろしてもそんな感慨を覚えることはなかっただろうが、これも少女との出会いを通して生じた変化だろうか？
この美しい景色をあの子にも見せてやりたいな、などと思った。

ムウマは夜目がきくので、日が落ちてからも問題なく活動できる。
だが、なかなか少女の姿を捉えることが出来なかった。空を飛んでいたヤミカラスなどにも尋ねてみたが、知らないという。
建物の中にいるのか、あるいはもう家に帰ったのだろうか？
一度墓地まで戻ってみようかなどと考え始めた頃、ムウマは少女の姿を発見した。いつもの四つ葉のクローバーのマフラーをしているので間違いない。あの子だ。
ムウマは袋を担いだまま町へと降りていった。

少女は道の端に棒立ちになり、傘もささずにぼうっと何かを見詰めていた。一点を見据えて離さないでいる。

なんだろうと思って釣られるようにムウマもそちらに目をやると、そこにはおしゃれな感じのレストランが建っていた。通りに面した部分はガラス張りになっていて、中の様子が外から見えるようになっている。

店内では少女と同じくらいの年齢の子供が、両親と仲睦まじげに食事をしていた。

暖かな光りが溢れる店内で、美味しそうにチキンなどを頬張りながら、楽しげに家族とおしゃべりをしている。

それを見詰める少女は寒くて薄暗い道路の上に立っていて、その背中はひどく物悲しげで寂しそうで……どうしようもなく一人だった。

長いことこの場に立ち止まっていたのか、耳や鼻の頭が冷えて赤くなっていた。

頭や肩に雪を積もらせながら、まるで遠くの惑星を眺めるかのような瞳をして、無言で店内の様子を見詰め続けている。

ムウマは何だかいたたまれない気持ちになり、声をかけそびれてしまった。

視線に気付いたのか、ふいに少女がこちらを振り向いた。

目と目が合う。

「あっ……」

恥ずかしいところを見られたとでも思ったのか、少女の頬が一瞬赤く染まり、小さく口を開いた。

すぐさま口を真一文字に結んでパっと視線をそらし、その場から立ち去ろうとする。

ムウマは木の実の詰まった袋を担ぎ直し、慌てて少女の後を追いかけた。

「ついて来ないで！」

少女は強い口調で言い放ち、足を早めた。道行く人々が、なんだなんだと道を開ける。

少女は雪を踏み荒らしながらどんどんスピードを上げていき、しまいにはマフラーをたなびかせながら走りだした。

『ま、待って……！』

言葉は通じないとは分かっていながら思わず声をかけて追いかける。

少女は右へ左へ町なかを疾走し、どんどん人気のない方へと走っていった。町の喧騒が遠のき、静かな住宅街へと入っていく。

それでもムウマは少女を追いかけるのを止めなかった。

……今、少女を一人にしてはいけない。

本能的にそう思ったのだ。

体力の限界が来たのか、しばらくして少女のスピードが弱まっていった。ハァハァと大きく肩で息をしながら壁に手をつき、足を止める。

少女は壁に寄りかかるように体を預け、そのままズリズリと体を落としていった。まるで全身の筋力がなくなってしまったかのように体から力が抜け落ち、その場にペタンと座り込む。

どうした訳か、そのまま動かなくなってしまった。

側に立っていた街灯が少女の姿をぼんやりと照らし、その背中を夜の闇の中に浮かび上がらせる。

ムウマは刺激を与えないようにゆっくりと少女の背中に近付いた。

少女はムウマがすぐ後ろまで来ているのを感じ取り、こちらに背を向けたまま、冷たい口調で言った。

「……どうしてついて来たの？」

『……』

「ついて来ないでって、言ったのに」

『……』

「あなたが追いかけてくるから、こんな所まで来ちゃったじゃない」

『……』

「本当はもう、二度とこんな所には来たくなかったのに……」

こんな所？

ムウマは疑問に思いながら前方を見やった。

そこはただのよくある十字路のようにしか見えなかった。四方を高い塀で囲まれているので見通しは悪いが、何の変哲もない道路である。

いや、電信柱のすぐ側に、雪に埋もれるようにして何かが置かれているのが目に入った。

それは、花束だった。

供えるように白い花が道の端に置かれている。

ムウマは以前主婦たちが井戸端会議を開いていた時の内容を思い出した。

（まさかここは……）

まるで前髪で表情を覆い隠そうとするかのように、少女は俯きがちに下を向いたままぽつりと漏らした。

「……ここでお父さんとお母さんは死んだの」

それは静かな夜の闇に飲まれて消えそうなほど小さな声だった。
「買い物に行った帰り道で車にはねられたの。それで二人とも、遠くの世界に行ってしまったの……」
ぽつりぽつりと抑揚のない声で、ひとり言のように喋り出す。
その頃、私は何も知らずに家でお留守番をしていて……。
お父さんたちが出かける時には行ってらっしゃいって言って普通に送り出したのに……。
それはいつもと変わらないことだったのに……。
いつまでたってもお父さんたちは帰って来なくって……。
不安になって何度も家の窓から外を見たけど、町はいつもと同じ感じで……。
夜になってもお父さんたちは帰って来なくって……。
とても怖くて寂しくなって、今にも泣き出しそうになっていた時、大人の人達が家に来て……。
少女の言葉は次第にまとまりがなくなり、チグハグになっていった。まるで今もそこに両親の亡骸が転がっているかのように、道路の一点を見詰めながら、うわ言のように

言葉を呟いている。
相変わらず雪は静かに降り続き、一人と一匹の体を濡らしていた。

少女がこちらを振り向いた。
街灯の明かりに照らされた少女の顔はゾッとするほど青白く、まるで泣いているような、笑っているような、なんとも言いがたい表情をしていた。
かじかんで赤くなった手で目元を覆いながら言葉を続ける。
「なんでだろうね。最初はとても悲しくて、涙がいっぱい出て、本当にずっとずっと泣き続けて……。これ以上泣いたら体中の水分がみんな無くなってしまうんじゃないかって思うくらい泣いたのに……ある時から、もう涙は出なくなってしまったの」

それはきっと、少女の防衛本能だったのだろう。
ある日突然少女を襲った深い悲しみ。
何の前触れもなく訪れた不幸と孤独。
それは十歳かそこらの少女には到底抱えきれぬほどの大きな苦しみであり、そんなものを抱えていてはうまく呼吸をするのもままならなくなって……。
だから少女は、感情に蓋をしたのだ。

重すぎる悲しみに心が押し潰されてバラバラになってしまわないように。
笑いもしなければ、泣きもしない心。
そういう心が、彼女には必要だったのだ。

それでも人間はロボットではない。
感情の全てに蓋をすることなど出来るはずもない。
少女は半ば雪に埋もれている献花の花束を見詰めながら、拳を固めて恨めしそうに呟いた。
「クリスマスはみんなでお祝いしようねって、約束したのに……」
今日がそのクリスマス。
約束は果たされることなく終わり、そして、生涯叶えられることもない。

少女は赤くかじかんだ手で自分の胸元をぎゅっと掴み、絞りだすような悲痛な声で言った。
「痛いの……。あの日からずっと、ずっとずっと……この辺が痛いの」
それは少女が初めて見せた感情の発露であり、嘆きだった。

ムウマは黙って少女の顔を見詰めていた。
両親を失い、一人ぼっちになり、悲しみや苦しみ、孤独に押し潰されそうになっている幼い少女。
そんな少女を前に、ムウマはなんと声をかけてあげればいいか分からなかった。
『……』
人を驚かせる事しか出来ない自分には、何も出来ない。
そもそも自分たちはポケモンと人間。
例え何かを語りかけた所で、その言葉が、その思いが、相手に伝わることはないのだが。
それでもムウマは、悲痛に顔を歪める少女を見詰めながら、”いたみわけ”が通じればいいのにと思った。
そうすれば傷付いた少女の心と自分の心とを足しあって半分こにして、少しでも彼女の心を治してあげることが出来るのに、と。

6　あたたかな恐怖

その時、ザッザッと雪を踏み鳴らしながら何者かが近付いてきた。
「相変わらず辛気臭い顔をしてるな」
それは以前墓地で出会った、ガキ大将風の体の大きな男の子だった。今日も友達を手下のように引き連れている。
少女は表情を隠すようにごしごしと腕で顔を拭い、すくっと立ち上がった。
「……何か用」
目元は赤くなっていたものの、その表情はいつもの冷たくて無感動な顔付きに戻っていた。

少年は側を浮遊しているムウマに気付き、にやりと笑った。
「なんだ、この間のムウマも一緒じゃないか。こいつはちょうどいい。探す手間が省けたぜ」
「……？」

「この間は恥をかかされたからな。その時の借りを返してやるぜ！」
どうやら水死体の幻を見せられてコケにされたのを根に持ち、復讐の機会をうかがっていたらしい。

少女は少年から目をそらし、ぼそりと小声で呟いた。
「……馬鹿みたい」
その声が届いてしまったのか、少年は赤くなってポケットからモンスターボールを取り出し、ずいっと突きつけてきた。
「こ、この間は丸腰だったからやられただけだ！　今日は兄ちゃんのポケモンをパクって……じゃない、借りてきたからな。ボコボコにしてやる！」
少年はそう言い直し、ボールを前方に放り投げた。
「行けっ、ヘルガー！」

中から出てきたのは”ダークポケモン”と称されるポケモン、ヘルガーだった。頭に二本の角を持ち、まるで肋骨が背中から体外に飛び出したかのような外見をしている犬型のポケモンだ。
雪の積もった地面に華麗に着地し、ガルルと低く呻った。白い雪上に黒い体がよく映

える。牙の隙間からボッと明るい炎を吹き出させ、ちらつかせる。
ヘルガーはとても引き締まったいい肉体をしており、すごく好戦的な瞳をしていた。ガッガッと前足で地面をひっかき、今にも飛びかからんと体をウズウズさせている。

多分あいつは、墓守りのサンドパンなどと違って最初からバトル用に育てられているポケモンだ。一見してレベルが高いと見て取れる。
しかもヘルガーのタイプは、悪・炎だった。ゴーストタイプのムウマとしてはかなり相性が悪い。
ヘルガーが大きく雄叫びを上げ、威嚇するように空中にごぉっと火炎を吐いた。舞っていた雪は瞬間的に溶かされて霧散し、辺りが炎で照らされた。
熱気に気圧され、ムウマは思わず後ずさる。

不安げな表情を浮かべて後退するムウマを眺め、少年は楽しげに笑った。
「へへっ、ざまあないな。いい気味だぜ」
しかし少年の視線を遮るように、少女がムウマの前に立ちはだかった。庇うように一歩前に出て、後ろのムウマにぼそっと囁く。
「……あなたは逃げなさい。元々、あなたには関係のないことなのだから」

だが少女はポケモンを持っていないようだし、自分だけ逃げ出してしまっては、この後少女がどんな目に合わされるかも分からなかった。

ムウマは背中に背負っていた袋からトゲトゲした木の実を取り出し、こっそり口の中に放り込んだ。むしゃむしゃ噛み砕いて嚥下する。

そして怖気を押し殺し、ずいっと少女の前に出た。少年とヘルガーのことを睨みつける。

「おっ？　なんだ、やる気か？」

「凄んでも全然怖くないぞ」

ヘルガーという秘密兵器がいるせいか、少年の後ろに控えている男の子たちが余裕ぶって野次を飛ばしてきた。ガキ大将風の少年も、へへっと鼻を鳴らしてあざ笑う。

「いいぜ、だったらバトルで決着をつけてやるよ。行くぜヘルガー、”かえんほうしゃ”！」

期せずしてバトルが始まってしまった。

ヘルガーが四肢を突っ張り、ガバッと大口を開いた。その口元に高熱源が集まっていく。

ムウマはちらりと背後を盗み見た。
すぐ後ろに少女がいる以上、避けるわけにはいかない……！
木の実が詰まった袋を雪上に放り出し、”まもる”の技を発動した。ムウマの正面に透明な盾のようなものが出現し、攻撃に備える。
その直後、ヘルガーの火炎放射が放出された。地面や周囲に積もっていた雪をすごい勢いで溶かしながら、ごおっと呻って炎の壁が迫ってくる。まるで夜が昼になったかのように周囲が明るくなった。
炎が守りの盾に直撃する。
『くっ……！』
それはすごい威力の火炎だった。踏ん張っていないと後方に吹っ飛ばされてしまいそうになるほどである。
盾に阻まれ、炎が左右に別れてそれていく。
やった、防ぎきったと思ったのもつかの間、ヘルガーが口元から火炎を撒き散らしながら”ほのおのきば”攻撃を仕掛けてきた。
『なっ……!?』
素早過ぎる。

反応が間に合わず、思いっきり胴体に鋭い牙を突き立てられてしまった。
肉に牙が食い込み、皮膚が焼ける。
「ムウマっ……！」
少女が緊迫した声で短く叫んだ。

ヘルガーはそのまま乱暴に頭を振り、ムウマを塀の方に叩きつけた。
「まだ俺達の攻撃は終わってないぜ！　ヘルガー、〝スモッグ〟攻撃だ！」
彼らの連撃は終わらない。
少年の指示を受け、ヘルガーは火炎放射を吐いたのと同じ口から毒ガスを吹き出し、浴びせかけてきた。視界が紫色の煙で覆い尽くされる。
ムウマはゴホゴホと激しく咳き込んでむせた。
（しまった……！）
毒ガスを吸い込み、毒状態になってしまったようだ。
息がうまく出来なくなり、胸がつかえたように苦しくなる。なんとか浮き上がろうとするのだが、体に力が入らず、雪の上にへたり込んでしまった。
それでもヘルガーは追撃の手を休めず、牙を向いてトドメの一撃を加えようとしてきた。

その時、少女が雪を蹴り上げながらダッと駆け出し、庇うようにムウマに覆いかぶさった。
「もう止めて！　この子は関係ないわ！」
しかしヘルガーは、まるでにやりと笑うように大きく口元を歪ませた。
そして姿勢を低くして大きく口を開き、”あくのはどう”攻撃を放った。
倒れているムウマにではなく、少女目掛けて。
「きゃっ……！」
衝撃を受け、少女の体は吹っ飛ばされた。
まるで暴風に弄ばれる紙くずのようにごろごろと地面を転がり、雪まみれになって向こうの方でようやく止まった。ぐったりとそのまま横になって動かなくなる。
命令以外の行動を取られ、少年は慌てたようにヘルガーに待ったをかけた。
「ま、待てヘルガー！　誰が人間の方に攻撃をしろって言った！　そんな命令はしてないぞ！」
ヘルガーはちらりと少年の方を見たが、そんなの知るかという風に鼻を鳴らしてそっ

ぽを向いた。まだまだ暴れたりないという風に空に向かって遠吠えをし、ごぉっと火炎を放つ。周囲の雪が熱で溶かされびしょびしょになっていく。

「よせ、止めろっ！」

少年は叫んだが、ヘルガーはお構いなしだった。正規のトレーナーじゃないから、言うことを聞かないのだ。

制御出来ず、好き勝手に暴れようとしている。

ムウマはなんとか体を起こし、少女の方を見やった。

まともに悪の波動を食らってしまったのか、少女はお腹を押さえて地面に転がったまま立てないでいた。苦しげに顔をしかめながら、ムウマに何かを伝えようと必死に口を動かしている。

何と言っているかは聞こえなかったが、その口の形は「に、げ、て……」とムウマに伝えていた。

……それを見て、ムウマは覚悟を決めた。

毒に侵された体にムチを打って立ち上がり、フワリと空中に浮かび上がる。

『……』

ヘルガーのことを睨みつけたまま、無言のままに”トリックルーム”を発動した。
周囲に半透明な壁のようなものが出現し、二匹を囲うように箱が形成される。
「な、なんだこれ……？」
初めて見る技なのか、後ろの少年は目を見張って驚き、戸惑っていた。
トリックルーム。これは中にいるポケモンの素早さを逆転させるエスパー技だが、自分たちをルームの中に閉じ込めるという効果もあった。
これでもう、トリックルームの壁に阻まれて少女がヘルガーの攻撃を受けることもないだろう。ちらりと背後を盗み見て、少女がトリックルームの外側にいることを確認する。
ムウマはヘルガーの方に向き直り、キッと鋭い瞳で睨みつけた。
……習得はしたものの、この技は生涯使うことはないだろうと思っていた。
なぜならこの技は、自分の命すら危険に晒すものだからだ。
元々正面切ったガチンコのバトルは苦手だし、そもそも自分は少女の手持ちのポケモンではない。だから少女のために意固地になって戦う必要はないのだが……それでも、立ち上がらずにはいられなかった。
ここで戦わなければ、いつ戦うというのだ。

ムウマは大きくを息を吸い込み、その技を発動した。

”ほろびのうた”

それは全身に鳥肌が立つような、聞いている者に死と絶望を感じさせるような甲高い歌だった。

反射的に三人の少年たちは耳を塞ぎ、ヘルガーも顔をしかめて低く呻った。

歌声が響き終わるのと同時に、ムウマとヘルガーの頭上に時計の文字盤のようなものが浮かび上がった。その表面には数字の”3”の文字が刻まれている。チッチッチッと時計の秒針が進み始める。

少年は度肝を抜かれたように素っ頓狂な声を上げた。

「ほ、滅びの歌だって……!?」

滅びの歌。それは一定時間後に、この歌を聞いた全ポケモンが瀕死状態になるという、まさに必殺の技だった。

体力が満タンだろうが、どんなに頑丈な防御力を持っていようが関係ない。伝説のポケモンだろうが幻のポケモンだろうが、場にいるすべての者を滅びへと導く歌である。

もちろん技の使用者であるムウマ自身も例外ではない。
文字盤の数字が”0”になれば、自分も倒れる。

ヘルガーは突如自分の頭上に出現した文字盤に驚き、辺りを駆け回ってそれから逃れようとした。しかし、文字盤はどこまでもぴったりとついて来る。
ムウマはにやりと不敵な笑みを浮かべて宣言した。
『どうする、ヘルガー？　このままだと後数分で、君も幽霊の仲間入りだよ？』

もちろん瀕死状態になるだけで実際に死んで幽霊化するわけではないのだが、そこはそれ、人やポケモンの恐怖心を喰らうことで生きてきた〝よなきポケモン〟の本領発揮である。ヘルガーの恐怖心を煽り、焦燥させる。”おどろかす”攻撃だ。
効果は充分なようで、ヘルガーはビクッと怯えてひるんでいた。
先程までは尻尾をぴんと立てて自信満々という感じだったのに、今は若干、尻尾が垂れ下がり気味になっていた。気圧されたようにジリジリと後退する。
格下のムウマのことをひどく警戒し始めたのだ。

だがこいつは、無抵抗なあの子を傷付けた。ただで帰すつもりはない。

ムウマの瞳が妖しくギロリと輝き、”くろいまなざし”が発動した。
これで勝負の決着がつくまで、ヘルガーはバトルから逃げられなくなる。
『……!?』
後ずさりをしていたヘルガーの体が、金縛りにあったかのように硬直した。それ以上後ろに下がれなくなる。

さらにムウマはしゃにむに突っ込み、”からげんき”攻撃を放った。
毒などの状態異常にかかっている時に発動すると、威力が二倍になるというトリッキーな技である。
ふいをつかれ、吹っ飛ばされるヘルガー。
物理系の攻撃はあまり得意ではないので大したダメージは与えられていなかったが、それでも牽制には十分役に立ったようだ。思わぬ反撃を喰らい、ヘルガーが動揺している。

そうこうしている間に、二匹の頭上の数字が”2”にカウントダウンした。
『ほらほら、どうするヘルガー？　時間がなくなってきたよ？』
挑発を続けるムウマ。

「お、おい。大丈夫か、ヘルガー？」
トリックルームの外側の少年が不安そうに声をかけた。
怒ったヘルガーはグルルと牙を剥いて呻り、猛然と火炎放射を吐いてきた。
ムウマは”かげぶんしん”を使ってそれを回避しようとした。雪の舞い散る空に、大量のムウマの分身が出現する。
ヘルガーは躍起になって全ての分身を撃ち落とそうと火炎を吐き続けた。周囲が真昼のように明るくなる。
後方で少年が焦ったように叫んだ。
「ま、待て、落ち着くんだヘルガー！　……そ、そうだ、”だましうち”攻撃を使うんだ！」
騙し討ち攻撃。それは繰り出せば攻撃が必ず命中するという技だった。いくら分身を作っていようが相手に必中してしまう。
だがテンパっていたためか、あるいは正規のトレーナーの命令ではないので指示に従うか否か一瞬迷ったのか、ヘルガーの動きが出遅れていた。
その隙にムウマは体当たりをするようにヘルガーに突っ込み、その胴体にガブっと噛

み付いて”いたみわけ”攻撃を発動した。
自分が受けたダメージや疲労度を相手に押し付け、代わりに新鮮なエネルギーを吸収してお互いの体力を半々にする。
その直後、ヘルガーの騙し討ち攻撃が炸裂した。
長い尻尾を使って体から引っ剥がされ、フェイント気味に繰り出された鋭い爪で体を切り裂かれ、吹っ飛ばされる。

『うぐっ……！』

騙し討ちは悪タイプの攻撃技なので、ゴーストタイプのムウマにはよく効いた。
それでも先に痛み分けを使って体力を回復していたおかげで……戦闘が始まる前に食べておいた木の実の効果もあって、なんとか耐え切ることが出来た。
先程ムウマが食べたのは、”ナモの実”という木の実だった。効果が抜群の悪タイプの攻撃を受けた時、その威力を一度だけ弱めてくれるという不思議な木の実である。相手はきっと悪タイプの技を使ってくるだろうと考え、予め口の中に放り込んでおいたのだ。
体を蝕む毒ダメージが苦しいが、大丈夫、まだやれる。

その瞬間、いよいよ二匹の頭上のカウントが残り”1”になった。
後1カウント耐え切れば、ヘルガーを共倒れに出来る。
ムウマは痛みをこらえながら体勢を立て直し、ヘルガーに問いかけた。
『さあ、残り1だよ。どうするヘルガー？』
『ぐぅ……』
『聞こえるだろう？　滅びの歌の最終楽章が。死神の足音が』
プレッシャーをかけ続ける。
ヘルガーはバトルに集中できず、ちらちらと頭上の文字盤ばかり気にしていた。
チッチッチと絶え間なく動き続ける秒針。
それが死神の宣告のようにヘルガーの精神を追い詰めていた。今やヘルガーの尻尾は怯えたように丸くなり、足の間に挟まっていた。
レベルや相性ではヘルガーの方が圧倒的に有利だったが……場は完全にムウマが支配していた。
ムウマとは、人間やポケモンの恐怖心を糧にすることで生きるポケモンである。
ヘルガーが焦りや恐怖心を覚えて気弱になるごとに、対するムウマは強気になっていった。

口先の言葉で相手を惑わせ、計算高く”わるだくみ”をする。ヘルガーや少年たちの気付かぬうちに、今やムウマの特殊攻撃力はぐーんと上がっていた。

「え、ええと、次の技は……！　次は何の技を……！」

自分の持ちポケモンではないせいか、少年は次にどんな指示を出せばいいか迷っていた。焦れば焦るほど頭が真っ白になって技名が出てこない。

黒いまなざしのせいで逃げられないし、滅びの歌のタイムリミットは目前まで迫っているし、おまけに後ろにいるトレーナーは本物のご主人様じゃないし、頼りない。

精神的に追いつめられたヘルガーの呼吸は乱れ、鼓動は早鐘のように早くなり……冷静な判断が取れなくなっていた。少年の指示も待たずに勝手に攻撃を開始する。

大きく牙を剥き出しにし、よだれを撒き散らしながら闇雲に”かみつく”攻撃や、あるいは”かみくだく”攻撃をしかけてきた。

ムウマは守るや影分身を使ってそれらの攻撃を紙一重でかわし続けた。トリックルームの効果のおかげで素早さが逆転しているので、どうにかその猛攻を捌ききることが出来る。

（いける……！）

ムウマは隙を突いて”おにび”攻撃を放った。
人魂のような青い炎が空中に出現し、ヘルガーを襲う。
鬼火は相手に直撃し、ヘルガーの体をぼおっと炎上させた。周囲の雪を溶かしながら燃え上がる。
だがしかし、すぐに炎の勢いは弱まり、まるでヘルガーの体に吸収されるように馴染んでかき消えてしまった。

「……？」
バトルの成り行きを見守ることしか出来ていなかった少年はその光景を見て眉をひそめていたが、ハッと何かに気付いたように歓声を上げた。
「そ、そうだ！　兄ちゃんのヘルガーの特性は”もらいび”だったんだ！」
特性、もらい火。
それは炎系の攻撃を受けてもダメージを受けず、代わりに自分の繰り出す炎系の技の威力がアップするという特性だった。究極の反炎系体質である。
少年は嬉々として叫んだ。
「ヘルガーのことを火傷状態にしたかったようだけど、失敗だったな！　ヘルガー、パ

ワーアップした力で”オーバーヒート”をぶちかましてやれ！」
ヘルガーが動きを止めて四肢を突っ張り、すうっと息を吸い込み始めた。命令通りにオーバーヒートを放つつもりだ。
しかし、ムウマの狙いは最初から別のところにあった。
先程の鬼火攻撃はヘルガーを火傷状態にしたかったのではなく、ヘルガーの足元の雪を溶かしたかったのだ。

雪は溶けると水になる。
そして、水は電気をよく通す。
（ロトムと友達になっていてよかったよ……）
ムウマは森の洋館に住んでいる友達に心の中で感謝しながら、渾身の力を込めてその技を放った。
”１０まんボルト”の技を。

トリックルームを発動していたおかげで、現在、ムウマの方が素早さが上だった。
ヘルガーがオーバーヒートを放つよりも先にムウマの体が激しく発光し、バチバチバチと音を立てて凄まじい電撃を放った。

電撃がヘルガーの体を穿ち、感電させる。

『……!?』

ヘルガーの体は引きつけを起こしたように激しくのたうった。足元が濡れていたおかげで電気は更に通りやすくなり、全身を痺れさせる。

十万ボルトの攻撃が終わった時、ヘルガーの体からは白い煙が立ち上っていた。オーバーヒートを放とうと大きく口を開けたまま、白目をむいて銅像のように硬直している。少し焦げくさい臭いがする。

そしてゆっくりと地面に突っ伏すように倒れ、そのまま動かなくなってしまった。

しばらくの間、誰も、何も喋らなかった。

長いようで短い、短いようで長い沈黙が続く。

少年がガクリと地面に膝をつき、呆然としながら呟いた。

「そ、そんな……兄ちゃんのヘルガーが……」

ヘルガーは完全に戦闘不能に陥っていた。

滅びの歌のカウントダウンが”0”になる寸前、バトルの決着がついたのだ。

バトルが終了したことによりトリックルームや滅びの歌の効果も消えた。二匹を囲んでいた半透明な壁が消え、ムウマの頭上に浮かんでいた文字盤も霞のように消滅する。

「ヘルガーがムウマ相手に負けるなんて……」

レベル的にも相性的にも有利だったので、まさか負けるなんて思っても見なかったのだろう。信じられないという顔をして、ボロボロになりながらも勝者となったムウマのことを見詰めている。

『ああん?』

ムウマがまだやるのかという風に睨みつけると、少年たちはひっと短く悲鳴を上げた。

脅すようにぼっと空中に鬼火の炎を出現させると、少年たちはヘルガーをモンスターボールに回収し、泡を食ったように逃げ出した。

「す、す、すみませんでしたー!」

夜の闇の中へと消えていく。

後に残されたのは満身創痍のムウマと、少女だけ。

何だが急に世界が静かになったようだった。辺りに静寂が戻り、外灯の明かりが一匹

と一人の姿を照らしている。
ムウマは全身の力が抜け、へなへなとその場に座り込んでしまった。
あ、危なかった……。
ずっと虚勢を張って強がっていたが、正直、負けるかと思った。
もう少しで滅びの歌のカウントダウンが0になり、相打ちになるところだった。ヘルガーがちゃんとビビってくれたおかげで助かった。もしかしたらあいつは、あれで案外臆病な性格だったのかもしれない。
後一発でもヘルガーの攻撃がヒットしていたら、多分ムウマはやられていただろう。
というか、後一歩でも身動きを取れば、スモッグによる毒ダメージのせいで死にそうだ。

ムウマは地面に寝転がり、雪が振り続ける灰色の空を見上げながらロトムのことを思い浮かべた。
古い洋館に住んでいるロトムと知り合って友達になった時、『人を驚かすのに使えるかもしれない』と思って、電気・ゴーストタイプの彼に”10まんボルト”や”チャージビーム”といった電気タイプの技の使い方を教わっていたのだ。
あれがなければ決定力に欠け、ヘルガーを倒しきれなかっただろう。今度良質な磁石

でも持って行ってやろう、などと考える。

向こうで倒れ伏せていた少女がお腹を押さえながら起き上がり、ムウマが投げ捨てた木の実や袋を拾い集めて駆け寄ってきた。

毒で苦しんでいるのを見て取り、急いでモモンの実を探しだして食べさせてくれた。解毒効果のある木の実である。

体から毒が抜け、すうっと体が軽くなるのが分かった。

『あ、ありがとう……。君は大丈夫だったかい？』

ムウマは心配そうに少女に話しかけた。

「……」

しかし少女は無言のままガサゴソと袋の中をあさり、オボンの実やらオレンの実、その他体力が回復する系の木の実を見つけてはムウマの口に無理矢理ねじ込もうとした。ぐいぐいと押し付けてくる。

『ちょ、多い多い……！』

カビゴンでもあるまいし、一度にそんなに大量に食べられるはずもない。木の実が喉につまり、けほけほとむせ返ってしまう。

ふいに、ぎゅっと体を抱きしめられた。
「まったく、無茶をするんだから……」
ポタポタと頬に冷たいものが当たる。
最初は振り続ける雪の粒が当たったのかと思ったが、それは少女が流した涙だった。
『えっ……？』

今までずっと笑顔も涙も見せなかった少女が、涙を流して泣いていたのだ。赤くなった頬につぅと涙のしずくが伝っていく。
「本当に、私なんかのために無茶ばかりして……」
腕に力を込めて、さらに強く強く抱きしめられる。
「怖かった……。私のせいで、あなたまで死んでしまうのかと思って、本当に怖かった……」

よなきポケモンのムウマは、人間やポケモンの恐怖心を糧に生きるポケモンである。
今までたくさんの人間やポケモンを驚かせ、恐怖させ、その『怖い』と感じた心を食べてきた。

ムウマの首元にある数珠のような赤い珠が淡く輝き、少女が感じた恐怖心を吸収しだした。

……それは、始めた味わう感じの恐怖心だった。

何だか胸のうちにぽっと小さく明かりが点ったような、心が暖かくなるような味だった。

抱きしめられた腕を通して少女の温もりが伝わってくる。

少女は未だに泣き続けている。

少女の泣き顔を見上げながら、ムウマはしばらくの間なすがままにされていた。

目をつむりながら考える。

人を怖がらせるのが本分の自分だが……たまにはこんなのも悪く無い。

7　少女とムウマ

あれから少女はあまり墓地に現れなくなっていた。
閉ざされていた心は少しずつ解きほぐされ、周囲に溶け込めるようになっていった。
以前はいつも冷たく無表情な顔付きをしていたけれど、時折り、その顔に笑顔の花が咲くようになっていた。
少しずつではあるけれど、引き取られた家でもよく喋るようになり、積極的に家族の輪に加わるようになった。いいお姉さんになるべく、弟である赤ん坊の面倒も進んで見るようになった。
あの二階建ての建物が新しい我が家なのだと、受け入れることが出来たのだろう。
止まり続けていた少女の時間は動き始め、再び、歩むことを始めた。

あのガキ大将風の少年とも和解……は出来ていないけれど、少なくとも、一方的にいじめられることはなくなっていた。
少女が反撃することを覚え、また、庇ってくれる友達も出来たのだ。
勝手に兄のポケモンを持ちだしたこともバレ、少年は後からこってりと絞られたらし

い。しばらくの間は彼も大人しくなるだろう。

少女は墓地に行かなくなったが、その代わり、日中から町なかでよくムウマの姿が見られるようになっていた。

イタズラ好きのよなきポケモンの名にかけて、いつか少女のことを心の底から怖がらせて、その恐怖心をすすってやろうというのだ。

今日も今日とて、少女の後ろをフワフワと浮遊しながら追いかけるムウマの姿が目撃されていた。

しかし、少女はそんなムウマの気持ちを知ってか知らずか、恐怖心の代わりに手作りのポフレなどをムウマに分け与えたりしていた。

「どう？　初めて作ってみたんだけど、美味しいかしら？」

意外にも、少女の作るポフレはまずかった。

見た目がポフレというより進化に失敗したベトベトンみたいになっている時点で嫌な予感はしていたのだが、予想通り、味もたいそうひどかった。この世のものとは思えないような渋味と苦味を併せ持っていたのだ。思わずぶほっと吹き出してしまう。

『ちょ、ちょっと待って、これ凄くまずいんだけど』

険しい表情をして訴えたが、少女は構わずに二品目を差し出してきた。
「あら、気に入らなかった？　こっちのは砂糖もいっぱい使ってるし、美味しいと思うんだけど」
さらに変な形に焼け焦げた謎の物体をおすすめしてきた。
あーんと口に含ませようとしてくる。
「遠慮しないでどんどん食べてね」
『いやいや、謹んで遠慮させてもらうよ！』

戦々恐々としながらムウマは逃げ出した。
「あっ、この間のお礼なんだからしっかり食べていってよ」
恐るべきポフレを持って追いかけてくる少女。
こっちが怖がらせて怯えさせるつもりだったのに、ムウマの方が怯えさせられていた。町なかで少女とムウマの追いかけっこが繰り広げられる。
……案外、一人と一匹はいいコンビになるかもしれない。

降り積もっていた雪は溶け、地面からは若葉が芽吹こうとしていた。
冬の間姿を隠して動きを鈍らせていたポケモンたちも、やがて活発に動き回るように

なるだろう。

町には春が近付いていた。

おしまい。